

修士論文(要旨)

2011年1月

中国人大学院生の意識と行動変容  
—アカデミック・インターアクションに着目して—

指導 宮副ウォン裕子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

209J3007

李麗麗

## 目次

<b>第1章</b>	<b>はじめに</b> .....	エラー! ブックマークが定義されていません。
1.1	研究背景と目的.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
1.2	先行研究.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
1.2.1	学習の「変容」に関する研究.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
1.2.2	アカデミック・インターアクション(AI)に関する研究.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
<b>第2章</b>	<b>中国の教育事情と問題点</b> .....	エラー! ブックマークが定義されていません。
2.1	中国の教育の問題とその由来.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
2.2	中国高等教育の現状と問題(学部・大学院).....	エラー! ブックマークが定義されていません。
2.3	中国の大学における日本語教育の現状と問題.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
<b>第3章</b>	<b>調査概要</b> .....	エラー! ブックマークが定義されていません。
3.1	調査方法.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
3.2	調査対象者.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
3.3	分析方法と枠組み.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
<b>第4章</b>	<b>調査結果と分析</b> .....	エラー! ブックマークが定義されていません。
4.1	意識変容.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
4.1.1	困難要素及びその変容.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
4.1.2	アイデンティティの変容.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
4.2	行動変容.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
4.2.1	アカデミック・インターアクション(AI)能力の変容.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
4.2.2	アカデミック・インターアクション(AI)活動の多様化.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
4.3	異文化間のインターアクションにおける意識と行動変容.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
4.4	留学生へのアドバイス.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
<b>第5章</b>	<b>総合的考察</b> .....	エラー! ブックマークが定義されていません。
5.1	変容の実態及び「十全的参加」への軌跡.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
5.2	変容をもたらす諸要因及びその相互関係.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
5.3	総合的なアカデミック・インターアクション能力.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
<b>第6章</b>	<b>おわりに</b> .....	エラー! ブックマークが定義されていません。
6.1	留学生教育への提言.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
6.2	今後の課題.....	エラー! ブックマークが定義されていません。

謝辞

参考文献

巻末資料

## 要旨

### 【キーワード】

主体・自律、アカデミック・ジャパニーズ、アカデミック・インターアクション、正統的周辺参加、意識と行動の変容、異文化交流

本研究では、人文系の中国人大学院生(中国人院生)、日本人大学院生(日本人院生)と日本人教員に対して行った半構造化インタビューを通して、「正統的周辺参加」理論を援用し、中国人院生がアカデミック・インターアクション(AI)にかかわる行動への参加過程での意識と行動変容のプロセスを解明することを試みた。研究課題は、AIに関わる実践共同体への「十全的参加」の軌跡、変容に影響をもたらす諸要因および諸要因間の相互関係を明らかにすることである。最後に中国人院生の意識と行動変容、日本人院生の観察、教員の期待などの質的データの分析から、大学院における総合的なAI能力を理論的枠組みとして示す。

中国の教育は教師主導型が多く、学生の自主的思考・実践能力の育成が十分に行われているとは言いがたい。指導者や権威ある先達の意見に疑問を呈することや、自身の批判的な意見を発表し他者と討論することに慣れていない中国人学生は日本の大学院に入学して初めて、主体的かつ自律的な勉強や研究を求められるようになり、アカデミック場面における学習方法の転換を迫られ困惑する者も少なくない。そのため、中国人院生の自主勉学能力、特にアカデミックな課題遂行能力の育成は、日本語教育の分野においても重大な課題になっている。

2002年に留学生を対象とする「日本留学試験」が実施された際、アカデミック・ジャパニーズ<sup>1</sup>(以下AJ)が日本語シラバスにおいてはじめて明確に示された。その後、AJより広範な「アカデミック・インターアクション」(AI)という概念はネウストプニー(2003)によってはじめて提唱された。アカデミックな教育領域においては、AJに加えて、実質行動としての多様なAI能力が求められている。このインターアクション能力には、日本留学の場面における狭い意味での言語問題(AJ)だけではなく、「接触場面での最良の行動」(ネウストプニー2003:140)をとる社会文化能力も含まれると、ネウストプニーは主張している。

Lave and Wenger(1991)は、学習を「知識が教師により伝達され、個体の中に蓄積されるもの」と捉える見方に異議をとねえ、学習に対する関わりのあり方が実践共同体への「周縁的参加」から「十全的参加」に移行するプロセスを「正統的周辺参加」として理論化した。この「正統的周辺参加」の学習理論に基づくと、新入生が大学院のアカデミック場面で学んでいく過程は、まさにこの正統的周辺参加そのものだと言えよう。大学院生活に適応していく過程は「正統的周辺参加」から「十全的参加」への移行過程と見なされる。本研究では、大学院留学生は、正統的周辺参加という条件のもとで、実際にAIへの参加過程において課題の遂行を重ねていくことによってアカデミック遂行能力を獲得していくと考える。

本研究ではアカデミック・インターアクション(AI)を異文化場面として捉えている。参加者は、中国人院生、日本人院生、教員の三つのカテゴリーに分かれる。調査対象者は首都圏の中規模大学にお

---

<sup>1</sup>調査研究協力者会議(2000)は、日本留学試験の「試験の目的」の項で、AJを日本の大学で学習・研究活動を行うための日本語能力と、日本での留学生活を送る上で必要な日本語によるコミュニケーション能力の二つの面から規定している。

ける日本語教育専攻修士課程の中国人院生 8 人(在籍 5 人、修了生 3 人)、日本人院生 6 人(在籍 5 人、修了生 1 人)、日本人教員 4 人である。データの分析と考察は Lave and Wenger(1991)の「正統的周辺参加」学習理論および、ネウストプニー(2003)の「アカデミック・インターアクション」の二つの理論的枠組みに沿って行う。

調査の結果、意識変容に関しては、留学生が AJ、AI に関する困難を感じることに、アイデンティティ(民族アイデンティティ、ゼミの帰属感、自我アイデンティティ)の変容が観察された。行動変容に関しては、AI 能力の向上と行き詰まり、適切なアカデミック・ストラテジーの使用、ゼミや研究会などでの人的リソースの自律的な構築と維持、協働学習への主体的な取組み、実践共同体における役割の変化、AI 活動の種類が多様化したことなどが挙げられた。そして、異文化間の双方向的なインターアクション(岩本 2010:63)においては、留学生と日本人院生は葛藤・摩擦を経て、解決へ向けて対処方略を考えたり、行動を調整したりすることを通して、学び合いや相互理解に至り、平等な研究パートナーの関係形成することが明らかになった。また、留学生に異国での勉学や生活の適応方策と近道を提示するため、中国人院生、日本人院生、教員の三者へのインタビューを通して経験談やアドバイスを得た。

分析・考察の結果、中国人院生の大部分が、2 年間の大学院課程において、AI に関連するさまざまな課題を遂行する中で、中国人院生の知識と技能が次第に高まり、他者とのかかわりが深まり、課題へのかかわり方が、初期の「正統的周辺参加」から次第に「十全的参加」へと移行していることが明らかになった。中国人院生は、課題遂行の過程において、特に研究効力感<sup>2</sup>が大きく作用し、彼らの自己変革と自律学習を促す牽引役として機能していることがわかった。

本研究の主な結果は次のようにまとめられる。(1) 研究対象者である留学生の大部分が、大学院修士課程で協働的な学びと自己研鑽を通じた「十全的参加」の方策を身につけ、それを望ましい行動変容として捉えている。しかし、AI の具体的な行動に関しては、獲得できたことがある半面、依然として完全に獲得・改善できないことがあることを意識している。(2) 教師は院生への指導の中で、比較的容易に指導可能な点と、院生本人の自覚なしには指導が困難な点を意識している。(3) 異文化間学術交流の場においては、支援・被支援の関係を二項対立的に固定化せず、相互交流の機会を創出し、双方向性の交流を活性化させるような視点と発想を持つことが重要である。

最後に、調査結果に基づき、AI の概念図を構築し提示した。日本の大学院における留学生が獲得すべき学習項目を可視化したことで、留学生教育や研究指導にささやかな貢献ができると考える。今後の課題として、さらに多くのデータを採取し、本研究で提案した AI 能力の理論的枠組みの検証・修正を重ね、さらに精緻化することが急務である。

---

<sup>2</sup>園田(2009:65)によると、研究効力感とは「研究活動の一つの目標行動として、研究能力への自信と達成への予測、及び研究に対する肯定的な態度」を指すという。

## 参考文献

- 浅井亜紀子(2006)『異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ』ミネルヴァ書房
- 伊藤奈賀子(2006)「大学における日本語力教育—アカデミック・ジャパニーズに注目して—」『岐阜女子大学紀要』36, p51-59, 2007 岐阜女子大学
- ウヴェ・フリック著/小田博志 [ほか] 訳(2002)『質的研究入門』春秋社
- 薄井宏美(2007)「接触場面の参加者の役割から見る社会文化能力の習得:インターアクション場面のケーススタディから」『千葉大学日本文化論叢』(8), 7631-5948 千葉大学文学部日本文化学会
- 植松晃子(2010)「異文化環境における民族アイデンティティの役割:一集団アイデンティティと自我アイデンティティの関係パーソナリティ研究 19(1), 25-37 日本パーソナリティ心理学会
- 加藤好崇(2010)『異文化接触場面のインターアクション:日本語母語話者と日本語非母語話者のインターアクション規範』東海大学出版会
- 神谷順子(2007)「異文化接触による相互の意識変容に関する研究:留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果」『北海学園大学学園論集』134, 1-17
- 岸磨貴子(2010)「大学院の研究プロジェクトへの十全的参加の軌跡」『日本教育工学会論文誌』33(3), 251-262
- 国際交流基金(2007)『平成17年度日本語教育スタンダードの構築をめざす国際ラウンドテーブル会議録』国際交流基金日本語事業部
- 小池源吾・志々田まなみ(2005)「成人の学習と意識変容」『広島大学大学院教育学研究科紀要、第三部、教育人間科学関連領域』53, 11-19 広島大学大学院教育学研究科
- 重田美咲(2008)「工学系大学院留学生の「正統的周辺参加」と日本語学習」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部、文化教育開発関連領域 57, 255-262
- 園田智子(2009)「大学院留学生の研究生活における困難度とその関連要因」『異文化間教育』(29), 64-76 異文化間教育学会 [編]. アカデミア出版会
- ソーヤー理恵子(2006)「理系研究室留学生における装置へのアクセスの社会的組織化」『文化と状況的学習 実践、言語、人工物へのアクセスのデザイン』凡人社
- 館岡洋子(2002)「日本語でのアカデミック・スキルの養成と自律的学習」『東海大学紀要. 留学生教育センター』22号、1-20 東海大学留学生教育センター
- ネウストプニー, J. V (2003)「アカデミック・インターアクションの理解にむけて」平成14年度~16年度科学研究費補助金基盤研究費(A)(1)課題番号 14208022 研究成果中間報告書『日本語留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』139-150
- 原田三千代(2009)「協働作文としてのピア・レスポンスに対する認識の変容過程」『BATJ』10,01-20 ヨーロッパ日本語教師会
- マリオット,ヘレン(2005)/宮崎七湖 [訳]「日本人留学生のアカデミック英語能力の発達」『日本語学』24(3), 86-97
- Jean Lave and Etienne Wenger(1991)/佐伯胖訳(1993)『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書